



1. 通勤ラッシュの行方
2. 科学技術週間に思う
3. 外人研修
4. 会誌と論文集

1. 最近の通勤ラッシュは、また一段と激しくなった。昨年末、佐藤首相が国電ラッシュの実情を視察し時差出勤の強化を指示したときは、これに何等かの対策が続くものと期待されたが、空しい期待に終わってしまった。一国の首相の着想、指示でことすむような簡単な問題ではないのだから仕方がない。

国鉄では第3次長期計画(40年度~46年度)をこの4月から着手した。これは総額3兆円に達するもので、通勤対策を重点とし、これに5000億円を投じている。総武線、南武線の複々線化等を含み、毎日秋葉原駅の超混雑に悩まされている筆者にははなはだ喜ばしいことである。

しかし、一方、過密人口に悩む大東京が、ますますその集中の度を強めていることには相違なく、これからの東京は、一体どのようなのだろうかと首をかしげざるを得ない。この際、10年先、20年先の、いや50年先の東京の総合的都市改造計画とこれにマッチした輸送体系を各種の縄張りにならずにわかれることなく樹立し、はっきりと、素人にもわかりやすい形で示してもらいたいものである。 [J]

2. 4月12日から科学技術週間が始まった。今年でもう6回目であるが、あまり世に知られていないようである。いろいろの角度から考えても、わが国の科学技術はもっともっと振興しなければならないという結論に達するのは当然だし、そのためには、一般国民にわが国の科学技術の実情を知ってもらい必要がある。しかし、それと同時に、わが国の科学技術が世界的にみて二流ぐらいにとどまっているのは、科学技術者や科学技術の行政にも大きな責任があると思われるので、この週間を機会として大いにこの点につき論議すべきであると思う。

研究者および行政者は、口を開けば研究費が乏しいというが、昭和40年度の政府科学技術振興費は約470億円で、一般会計歳出の約1.3%である。どうみても多いとはいえないが、10年前に比して実額で約5倍以上になっており、研究所や大学の建物と施設は見ちがえるように良くなってきている。しかし、優秀な科学者は年々20~30人も海外へ流出している。外国の会社と提携している産業会社では、優秀な研究スタッフを提携先の研究所へ供出している。こういうことがどうして起るのか、科学技術週間を機会に良く考えてみたいものである。 [C]

3. 最近、海外から、とくに南米や東南アジアなどの後進地域からの技術者の研修が行なわれるようになったことは、わが国の事情を理解してもらい、あわせて国産技術の海外進出の機会をつくるという意味で、誠に結構なことだと思う。しかし、その運営については、ちょっと考えさせられる点も二、三見受けられる。第一に、日本へ留学するのに、日本語についての理解を深めるような努力が払われていないように見えることである。国連経費による委託などを除いて、日本政府の招く留学生は、当然日本語についてある程度の知識を有すべきであり、これは、現在受入れられている程度の優秀な留学生にとっては大して難しくないことと思われるし、留学を希望する者の義務でもあろう。第二の点は留学生に支払われている給費や、講師の報酬などが不適当なことである。現在、行なわれているどの国の留学生制度でも、給費はその国の普通勤労者の平均賃金程度である。このような国際比較から見ると、現在のわが国の給費は相当に高過ぎ、それに比して、研修講師への手当は、また極端に低いということが聞かれる。このようなことは、せつかく紹介した外国人に、わが国の現状を曲解させ、あなごりを受ける原因ともなりかねないと思われるので、関係者のご検討をお願いしたい。 [S]

4. 4、5年ぐらい前だったか、土木学会誌はその伝統(?)ある装丁を改めて、きわめて斬新になってきたが、今年の1月から再び表紙が新しくなった。土木学会誌は、わが国の土木技術の現状を示す最もすぐれた文献であって、興味深く感激しながら読むことも多い。ところが論文集は、むずかしそうな題目をいかめしくも並べた表紙を、数年前経費の節減をはかるといふれこみで採用したが、現在もそのままである。最高の学問の研さん結果の集りであるということの誇示のためならば、むずかしそうな題目を羅列して読者を圧倒するのもよからう。そのような気持が編集委員会にあらうとは思わないが、工事報告も特殊なものは掲載されるだろう論文集である。とにかく開いてみようかと思うような親しみの持てる体裁にしてみたらどうだろう。筆者のような勉強嫌いも、あるいはむずかしい論文でも投げ出さずに努力して読むようになるかも知れない。 [E]